

生命機能解析学分野の復旧状況

前代未聞の大震災より、もうすでに3ヶ月が過ぎました。その間、多くの方々より心あたたかいお見舞い、お励まし、そしてご支援を頂戴いたしました。お陰様で、東北大学では授業・研究を再開しております。皆様に深く感謝いたします。

当分野は、総合応用薬学研究棟（C棟）の最上階に位置していることもありまして、実験台上の機器や試薬などの多くは床に落下しました（写真左）。壁に金具で固定しておいた棚やインキュベーター、冷蔵庫も倒れたり、移動したりしまし



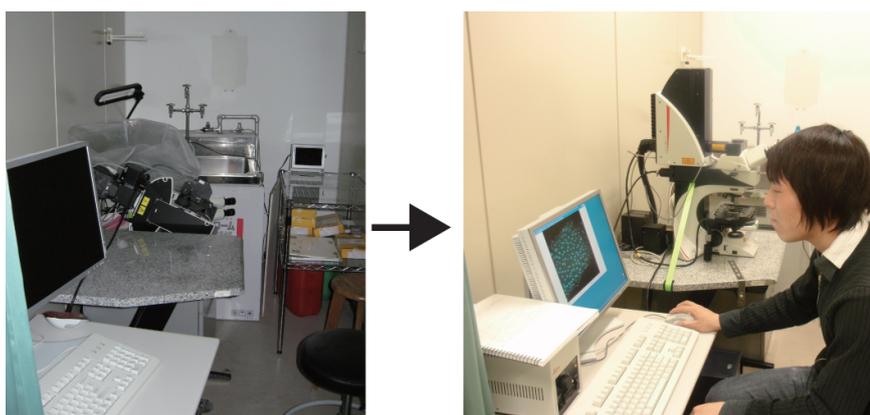
たし、地震による震動でロックがかかる棚からも、ロックが壊れて引き出しごと、あるいは扉ごと外れて落下しました。その時は、とにかく全員を屋外の安全なところへ避難させるので精一杯でしたが、幸い、誰一人として怪我することもなく避難することができました。地震直後の余震が納まるのを待って、数名のスタッフと共に、学生さんの鍵や貴重品、コートなどを取りに戻りました



が、あまりの惨状に驚くと共に、人的被害が無かったことに安堵しました。おそらく、施していた地震対策が、避難のためのスペースや時間の確保に寄与したのではないかと考えています。

当時、国立台湾大学から Shih-Ting Kang さんが、一週間の予定で共同研究のために滞在していました。震災後 2 日間は、中国からの留学生と一緒に避難生活でしたが、台湾日本研究学会名誉会長の許水徳先生からの依頼で、群馬から亀井元一さんが来て下さり、無事台湾へ帰国する事ができました。ベトナムからの留学生のグエン君は、震災後一時的に帰国しましたが、ベトナムの大学生達と集めた 5 万人の方々からのメッセージと共に戻り、南三陸町と気仙沼の被災者の方々へ届けました。ボランティア活動に参加した研究室のメンバーもいます。

現在では、研究室のメンバーの努力の甲斐もあって、ほぼ通常の研究活動を再開しています(写真右)。地域の中核をなす大学として、新しい知の創造と人材育成を行い、この大災害からの復興に少しでも貢献したいと思っております。



平成 23 年 6 月 21 日 倉田祥一郎